

〔優秀作〕

馬琴小説の平仮名字母の研究

——読本と合巻の比較——

市 地 英

—

江戸時代の小説類にはいわゆる変体仮名が使用されており、現代人にとってその読書を困難にしている。「カ」や「ケ」や「シ」などに複数種の字体があり、文中に使用されるのが通常であった。こうしたことは、平仮名の字体が一種類になっている我々にとって奇異な表記法といえる。

しかしながら、複数種の仮名字体の使用は、江戸時代において教養層から庶民層まで幅広く、文章表記の方法としてごく普通に機能していた。庶民層まで読み書きが浸透したのは江戸時代になってからであるともみられるが、それ以前から平仮名字体の種類は豊富であり、文芸や消息などの文章表記に多種類が使用されていた。現行仮名表記の時代より、平仮名字体の種類が豊富な時代の方が、歴史的に長いのである。

本稿では江戸後期の小説、読本と合巻を比較し、変体仮名の種類

が多い平仮名表記の実態について考察していきたい。

江戸時代の小説に使用されていた変体仮名に関しては、これまで様々なことが明らかになっている。特に、板本の仮名字体については江戸時代の小説類が時代を下るにつれて、ジャンルごと、平仮名の種類が減少する傾向にあったことが明らかにされている⁽²⁾。江戸時代の小説類においては、小説のジャンルによって、使用される平仮名の種類総数が異なるという特徴がみられる。

読本と合巻の体裁としては、読本は巨郭の内に整然と文が並び、挿絵は別になっている。また、その文章は漢字仮名交じり文で、漢語が多用されており、漢字の多くに平仮名で振り仮名が振られている。一方、合巻は絵が中心に据えられており、その周りに文章が配置されている。文章は平仮名主体で、漢字は極力少なくされている。こうした小説のジャンルとしての違いと、文体としての違いがあれば、平仮名の種類総数、その有り方も異なると考えられる。

個々の作品を調査・検討した先行研究は多くあるが、読本を個別

に調査した研究は少なく、馬琴読本を調査した研究は仮名字体総数が報告されているのみであり、具体的な字体は示されていない。⁽⁴⁾

本稿で扱う読本と合巻では、ジャンルと読者対象が異なる、同時期の小説の実態が比較可能である。使用された平仮名の種類について比較して、具体的な違いをみていきたい。

読本に限らず、江戸時代出版された本は、木版による印刷で制作されているため、自筆稿本と板本とでは表記の変更が行われることがあった。作家が書いた稿本を、筆耕が清書し、彫り師が清書を基に板を彫る、少なくとも三人以上の手を経て、読者の手に届く本の表記が決定されるので、その改変は容易に起こりうることだったと考えられる。作家の意図せざる文面になってしまう場合もあったらしく、曲亭馬琴が『朝夷巡嶋記』で、板本の表記ゆれについて「句説を訛り。語勢を失ひ。文義を謬ざるもの稀なり。」と板本に至る過程で生じた誤謬を挙げていることが知られている。

しかしながら、多くの読者が実際に目にした書面は、板本として流通した本である。板本の平仮名表記の調査は、この大衆性に受け入れられた媒体として考察が可能なのである。

これらを踏まえて、本稿では江戸の作家、曲亭馬琴の、最も読者を獲得したといわれている読本の一つ、『椿説弓張月』(文化四年)と、同作家の合巻『行平鍋須磨酒宴』(文化九年)の平仮名実態の比較を試みる。⁽⁶⁾

今回は字母の種類を調査した。江戸時代の作品の調査においては、同字母であっても字形の違うものを、使い分けがなされる字体とし

て認定する場合が多く、『椿説弓張月』、『行平鍋須磨酒宴』においても、読本の《奈》、読本・合巻の《尔》、『毛』など平仮名字体の異なりが共通しており、検討すべきといえるが、『久』など使い分けがなされている字体の異なりの判断が難しいものも多く、認定基準を決める必要もでてきて、調査が煩雑化してしまう。本稿では、確実に区別ができる、字源の違いという枠での平仮名表記の実態を明らかにすることにした。⁽⁸⁾

読本『椿説弓張月』は本文と振り仮名に分けて字母を調査した。合巻『行平鍋須磨酒宴』の場合は、文章中に漢字に振り仮名をふっている例がいくつもあったが、用例数が少ないため省いた。

調査範囲は次の通りで、調査した字数はそれぞれ約八〇〇〇字である。

『椿説弓張月』前編

本文	卷之一	七丁裏	卷之二	三丁裏	三行目
振り仮名	卷之一	七丁裏	卷之二	一丁表	二行目
『行平鍋須磨酒宴』					
本文	三丁裏	十五丁表		九行目	

二

まず、『椿説弓張月』前編の本文と振り仮名、及び『行平鍋須磨酒宴』の本文でどのような平仮名字母が使用されているか、全体的にみていきたい。

『椿説弓張月』本文・振り仮名、『行平鍋須磨酒宴』の本文におい

て、それぞれ使用されていた字母の種類数は次の通りである。

『樗説弓張月』本文 八〇種

『樗説弓張月』振り仮名 五七種

『行平鍋須磨酒宴』本文 六三種

次に、どのような字母が使用されていたのか具体的にみていき

『樗説弓張月』本文(八〇種)

・字母が一種のもの(二十二の仮名)

- 【イ】以【ウ】字【エ】衣【オ】於【ク】久【サ】左【セ】世
- 【ソ】曾【チ】知【テ】天【ナ】奈【ヌ】奴【ミ】三【ム】武
- 【モ】毛【ヤ】也【ユ】由【ヨ】与【ラ】良【ワ】王【ヰ】為
- 【ン】无

・字母が二種のもの(十九の仮名)

- 【ア】安阿【カ】可加【キ】幾起【コ】己古【シ】之志
- 【タ】多太【ト】止登【ネ】祢年【ノ】乃能【ヒ】比飛
- 【フ】不婦【ヘ】部遍【ホ】本保【マ】末満【メ】女免
- 【リ】利里【レ】礼連【ロ】呂路【ヲ】遠越

・字母が三種のもの(四つの仮名)

- 【ケ】介計希【ス】春須寸【ツ】川徒津

【ハ】者八盤

・字母が四種のもの(二つの仮名)

- 【ニ】尔丹耳仁【ル】留累類流

『樗説弓張月』振り仮名(五七種)

・字母が一種のもの(三十九の仮名)

- 【ア】安【イ】以【ウ】字【エ】衣【オ】於【カ】可【キ】幾
- 【ク】久【コ】己【サ】左【セ】世【ソ】曾【チ】知【ツ】川
- 【テ】天【ト】止【ナ】奈【ニ】尔【ヌ】奴【ノ】乃【ヒ】比
- 【フ】不【ヘ】部【マ】末【ム】武【メ】女【モ】毛【ヤ】也
- 【ユ】由【ヨ】与【ラ】良【ル】留【レ】礼【ロ】呂【ワ】王
- 【ヲ】遠【ヰ】為【ヱ】恵【ン】无

・字母が二種のもの(九つの仮名)

- 【ケ】介計【シ】之志【ス】春寸【タ】多太【ネ】祢年
- 【ハ】者八【ホ】本保【ミ】三美【リ】利里

『行平鍋須磨酒宴』本文(六三種類)

・字母が一種のもの(三十三の仮名)

- 【ア】安【イ】以【ウ】字【エ】衣【オ】於【ク】久【コ】己
- 【サ】左【セ】世【ソ】曾【チ】知【テ】天【ト】止【ナ】奈
- 【ヌ】奴【ノ】乃【フ】不【ヘ】部【ホ】本【ミ】三【ム】武
- 【メ】女【モ】毛【ヤ】也【ユ】由【ヨ】与【ラ】良【ル】留
- 【ロ】呂【ワ】王【ヰ】為【ヱ】恵【ン】无

・字母が二種のもの(十五の仮名)

- 【カ】可加【キ】幾起【ケ】介計【シ】之志【ス】春寸
- 【タ】多太【ツ】川徒【ニ】尔仁【ネ】祢年【ハ】者八
- 【ヒ】比飛【マ】末満【リ】利里【レ】礼連【ヲ】遠越

最も字母の種類が多いのは、読本本文の【二】【ル】で四種の字母が使用されている。読本振り仮名と合巻は一種から二種に留まっているので、読本本文は三種以上使用されている仮名があり、更に半数以上の仮名に複数種の字母が使用されている点が特徴といえる。二種の字母が使用されている仮名が、読本振り仮名より合巻の方が多いいのは、平仮名文による機能的な使用が行われているからかと推測できる。

次に、それぞれに共通した字母を分類してみる。

A 読本本文・振り仮名、合巻すべてにみられた字母

【ア】安【イ】以【ウ】宇【エ】衣【オ】於【カ】可【キ】幾
 【ク】久【コ】己【サ】左【セ】世【ソ】曾【チ】知【ツ】川
 【テ】天【ト】止【ナ】奈【ニ】尔【ヌ】奴【ノ】乃【ヒ】比
 【フ】不【ヘ】部【ホ】本【マ】末【ミ】三【ム】武【メ】女
 【モ】毛【ヤ】也【ユ】由【ヨ】与【ラ】良【ル】留【レ】礼
 【ロ】呂【ワ】王【ヰ】為【ヲ】遠【シ】无

【ケ】介計【シ】之志【ス】春寸【タ】多太【ネ】祢年
 【ハ】者八【リ】利里

B 読本本文と合巻にみられた字母

【カ】加【キ】起【ツ】徒【ニ】仁【ヒ】飛【マ】満【レ】連
 【ヲ】越

C 読本本文・振り仮名にみられた字母

【ホ】保

D 読本振り仮名と合巻にみられた字母

【エ】恵

E 読本振り仮名のみみられた字母

【ミ】美

F 読本本文のみみられた字母

【ア】阿【ケ】希【コ】古【ス】須【ツ】津【ト】登【ニ】丹耳
 【ノ】能【ハ】盤【フ】婦【ヘ】遍【メ】免【ル】類累流
 【ロ】路

Aに挙げた字母は四十八の仮名すべてにわたっているもので、当時の平仮名表記上、基本になっていた字母だと考えられる。また、平仮名ばかりで書かれる合巻の文章のような、いわゆる大衆的な平仮名文であるときは、A・B・Dの字母が基本的に使用されていた。一方で、合巻に登場する字母はすべて読本本文・振り仮名に使用されているが、読本本文・振り仮名には、本文ではC・F、振り仮名ではC・Eのように、合巻にはない字母が使用されている。

Bは読本本文と、合巻とに共通する、すなわち文・文章の表記に用いられたものである。したがって、語の区切れや文の切れ目など

表 1

	字母	読本本文	読本振り	合巻
ホ	◎保	39 (86.7%)	35 (31.0%)	0
	本	6 (13.3%)	78 (69.0%)	80 (100%)

の表示に活用された仮名である可能性がある。Bについては後述する。

Cは【ホ】《保》のみが使用されていた。表1は【ホ】の使用数をまとめたものであり(割合(小数点以下第三位を四捨五入)を括弧に入れて示す)、Aにあたる《本》を併記し、Cに該当する字母には◎を付けた。

読本本文では《保》が《本》より多く使用されているが、振り仮名では《本》が《保》の二倍以上使用されている。合巻では【ホ】は《本》のみであるが、読本本文・振り仮名では両方に、ある程度《保》の使用数が認められる。《保》は黄表紙や合巻では少数の使用もしくは避けられる傾向があり、明らかにジャンルによる違いがある字母の一つといえそうである。Dに関しては読本本文に【エ】の仮名が調査範囲内に登場しなかったため、読本振り仮名と合巻本文のみに使用されているということになっている。

Eは【ミ】の《美》のみであり、一例であった。ほかはすべて《三》が使用されている。

この一例は次のものである。該当箇所のみ《美》で示し、あとは通行の平仮名表記で示す。「こと」は合字である。該当箇所は「勅」に付された振り仮名「みこと」であり、この語

頭の「み」が《美》である。

勅美ミ (巻之一 十一丁裏 三行目)

この振り仮名の直上は漢字であり、「時」に「とき」という振り仮名が付されている。この振り仮名「とき」がすぐ下の「《美》「こと」のり」に続いてしまっているので、語の区切れとして《美》の使用に関わっていると考えられるが、一例のみなので判断し難い。

Fは読本本文のみに使用されていた字母である。このFの仮名が多い点に、読本の特徴が表れている。Fについても後に検討したい。振り仮名はA・C・D・Eが使用されていた。振り仮名に関しては「振り仮名という、美しさよりもわかりやすさを目的とする実用的な仮名では、単純な形が採用されていた」という特性があると考えられる。Aの字母のものとBの字母のものとの字の大きさを比較すると、Bの方が横幅があつたり、平仮名としても画数が多く複雑に見える形であるので、漢字の横に小さな文字で表記しなければならぬ振り仮名にBのものは使用を避けた可能性が推測される。「雨月物語」に使用された振り仮名と「椿説弓張月」の振り仮名の字母を対照すると、「雨月物語」には《春》《太》《美》、「椿説弓張月」には《丹》《連》《和》の三例が使用されていないが、その他の字母は一致した。読本の振り仮名は本文に比して字母の数を減らす意識が働くのだと考えられる。

三

まず、Aの字母を検討していきたい。

表 2

	字母	読本本文	読本振り	合巻
ケ	◎介	57 (64.8%)	32 (21.9%)	40 (33.3%)
	◎計	25 (28.4%)	114 (78.1%)	80 (66.7%)
	希	6 (6.8%)	0	0
シ	◎之	418 (89.1%)	308 (67.2%)	341 (74.6%)
	◎志	51 (10.9%)	150 (32.8%)	116 (25.4%)
ス	◎春	167 (86.5%)	21 (15.0%)	150 (95.5%)
	◎寸	9 (4.7%)	119 (85.0%)	7 (4.5%)
	須	17 (8.8%)	0	0
タ	◎多	146 (99.3%)	432 (99.1%)	223 (89.6%)
	◎太	1 (0.7%)	4 (0.9%)	26 (10.4%)
ネ	◎祢	6 (85.7%)	25 (49.0%)	11 (25.6%)
	◎年	1 (14.4%)	26 (51.1%)	32 (74.5%)
ハ	◎八	417 (88.3%)	90 (45.5%)	258 (78.2%)
	◎者	39 (8.4%)	108 (54.5%)	72 (21.8%)
	盤	16 (3.4%)	0	0
リ	◎利	347 (94.3%)	150 (92.0%)	239 (93.0%)
	◎里	21 (5.7%)	13 (8.0%)	18 (7.0%)

読本本文・振り仮名、合巻に共通していた一種類のものは、多くの資料に使用されているので、説明するには及ばない。ほとんどが現行仮名の字母にあたる。《可》《尔》《本》《三》《王》は現行仮名ではないが、江戸の板本で最も使用されていた仮名であることは、いうまでもない。

次に、複数種の字母が使用されている場合は、どのような使用数の傾向がみられるか検討していきたい。該当する仮名は【ケ】

【シ】【ス】【タ】【ネ】【ハ】【リ】である。表2は二種類の字母の使用数をまとめ(割合(小数点以下第三位を四捨五入)を括弧に入れて示す)、該当字母には◎をつけ、Fに該当する読本本文のみにみられる字母がある場合は併記した。

まず、【ケ】は、読本本文は《介》が多く、《計》はその約半数である。また本文のみに《希》が少数使用されている。振り仮名は《計》がはるかに多く、《介》の使用が少なくなっている。合巻は《計》が多く、《介》はその半数となっており、読本本文・振り仮名、合巻それぞれで使用傾向と比率が異なることが分かる。

読本においては、本文と振り仮名で二種の字母の使用数が逆転していることが特徴的だといえる。《介》は助動詞「けり」「けん」といった付属語や、形容詞活用語尾に慣用的に用いられると指摘されており、読本本文の《介》が振り仮名より多いのは本文に《介》の慣用的使用が偏るからかと推測できるが、本稿ではその可能性に触れるに留め、詳しい検討は別の機会に譲りたい。

【シ】は読本本文・振り仮名、合巻それぞれで使用比率は異なるが、いずれも《之》の使用数の方が《志》より多い。【シ】は《志》が語頭、《之》が非語頭という使用傾向があるとよく知られている。「椿説弓張月」と「行平鍋須磨酒宴」の数量にも、そうした傾向が表れていると考えられる。

【ス】は、読本本文は《春》が圧倒的に多く、《寸》の使用はわずかであった。《寸》は読本本文のみに使用された《須》よ

り使用比率が低い。その一方で、振り仮名は《寸》がはるかに多く、《春》が少ない。合巻は《春》が圧倒的に多く、《寸》がわずかという結果であり、読本本文の使用数と似ているといえる。しかし、《寸》《春》は江戸の文献にほぼ例外なくみられるものの、特定の使用傾向がこれまでの研究で特に見出されていない。

【タ】は読本本文・振り仮名、合巻で、いずれも《多》の使用数が《太》を大きく上回る結果であった。しかし、《太》の使用が読本本文・振り仮名では一パーセント以下であるのに対し、合巻では一〇・四パーセントの使用がみられる。これにより、読本と合巻で《太》の使用に差があることが分かる。庶民向け平仮名文の草双紙では、語の区切れを明示する補助的な平仮名があることが指摘されている。《太》は語頭に使用される例が多く、合巻に《太》が読本より多いのは、庶民向けの平仮名文の性質を持つためと考えられる。

【ネ】は、読本本文は【ネ】の使用例自体が七例と少ないので、傾向を判断するには早計であるが、《祢》の使用が六例を占めていることに注目される。振り仮名に《祢》《年》がほぼ同等に使用されていたのと対照的である。合巻では【ネ】は《年》が《祢》の二倍以上であり、読本本文・振り仮名、合巻、いずれも使用傾向が異なった。《祢》《年》も他の文献で、《祢》は語の位置に拘らずどこにでも使用され、《年》は非語頭に偏ることが指摘されている仮名である。

【ハ】は、読本本文は《ハ》が圧倒的に多く、《者》はそれより少ない。振り仮名は《者》がやや多いが《ハ》もほぼ同等に使用され

ていた。合巻は《ハ》が多いが、《者》の使用数も決して少なくはない。このように【ハ】の使用比率にはそれぞれバラつきがある。《ハ》は助詞やハ行転呼音などへの使い分けが知られており、【ケ】と同様に慣用的な使い分けが読本本文・振り仮名の字母使用傾向に影響していると推測できるが、こちらも今回はその可能性に触れるに止める。

【リ】はいずれも《利》が九割以上使用され、《里》が少ない。読本本文・振り仮名、合巻それぞれの割合も同等といえる。【リ】には、共通した使用規則があったかと推測できる。

以上のように読本本文・振り仮名、合巻で共通している仮名でも、必ずしも同傾向ではないと分かった。これら二種の字母も多くの文献で見られるが、読本と合巻で使用数の傾向が異なるものがあった。合巻では、必ずいずれも片方の字母が多く使用され、もう一方がそれより少ない。多い字母が少ない字母の二倍ほど使用されている場合、圧倒的に少ない場合といった数量の違いはあるが、主体的な字母、補助的な字母といった傾向は一致している。読本本文・振り仮名は、二種の字母の使用数が逆転している、または使用比率が異なる仮名があった。

四

次に、Bの読本本文と合巻でのみ二種類の字母がみられた【カ】【キ】【ツ】【ニ】【ヒ】【マ】【レ】【ヲ】をみていきたい。使用数は表3にまとめ(割合(小数点以下第三位を四捨五入))を括弧に入

表 3

	字母	読本本文	読本振り	合巻
カ	可	349 (89.9%)	378 (100%)	411 (89.1%)
	◎加	39 (10.1%)	0	46 (10.9%)
キ	幾	84 (67.7%)	261 (100%)	140 (79.5%)
	◎起	26 (32.3%)	0	36 (20.5%)
ツ	川	96 (91.4%)	219 (100%)	214 (99.1%)
	◎徒	8 (7.6%)	0	2 (0.9%)
	津	1 (1.0%)	0	0
ニ	尔	473 (87.1%)	53 (100%)	268 (99.3%)
	丹	67 (12.3%)	0	0
	耳	2 (0.3%)	0	0
	◎仁	1 (0.2%)	0	2 (0.7%)
ヒ	比	152 (96.8%)	194 (100%)	181 (99.5%)
	◎飛	5 (3.2%)	0	1 (0.5%)
マ	末	88 (95.7%)	208 (100%)	166 (84.3%)
	◎満	4 (4.3%)	0	31 (15.7%)
レ	礼	161 (77.0%)	86 (100%)	160 (98.8%)
	◎連	48 (23.0%)	0	2 (1.2%)
ヲ	遠	424 (98.4%)	42 (100%)	176 (94.6%)
	◎越	7 (1.6%)	0	10 (5.4%)

て示す)、該当字母には◎を付け、同じ仮名を表わすA・Fにあたる字母と併記した。

いずれも二種類の字母の一方が多く使用され、もう一方がそれより少ないという傾向がある。片方が主体的に使用されて、もう一方が補助的に使用されていた字母とみられる。

【カ】は《可》が主体的に使用され、《加》が補助的である。その割合は読本本文と合巻でほとんど同じである。《加》はこれまで調

査された文献のほとんどで語頭に用いられることが分かっている。

【キ】は《幾》が主体であり、補助的な《起》の割合が読本本文の方が若干多めである。しかし、読本、合巻ともに《起》は二割から三割使用され、ほかの字母と比べてもやや使用頻度が高いといえる。《起》もほぼ例外なく語末での使用が指摘されている。

【ツ】はいずれも圧倒的に《川》の使用数が多い。《徒》は使用数

が読本が八、合巻が二と、読本の方が若干多めである。《徒》も語頭に限って使用されることがある。

【ニ】は《尔》が圧倒的に多く使用され、《仁》の使用は一、二例とわずかである。読本本文だと《尔》の次に《丹》が多く使用されており、その次に《耳》、一番少ないのが《仁》、という字母の種類が多様さがあり、合巻が《尔》《仁》の二種のみであるのに対し、読本本文には特殊な字母が使用されると分かる。《仁》は、他の文献で語頭での使用傾向が指摘されている。¹⁹⁾

【ヒ】は《比》が主体的であり、《飛》の使用はわずかである。《飛》は板本によっては語頭に使用されることが分かっている。²⁰⁾

【マ】は主体的に使用されている字母は《末》である。読本本文の《満》の使用比率が四・三パーセントである一方、合巻では一五・七パーセントの使用がみられ、読本本文より使用頻度が高いことが分かる。また、《満》は特定の語での使用や、非語頭での使用傾向が指摘され

ている。²⁴⁾

【レ】は《礼》が主体的に使用され、【マ】とは逆に、補助的な字母の《連》は合巻には少ないが、読本本文には二三パーセントとやや多めに使用されている。《連》も文献によっては語末に使用が偏る傾向が指摘されているが、大体の文献では特に定まった使用傾向がみられず、時折混ぜられる仮名という見方もある。²⁵⁾

【ヲ】は《遠》が主体的であり、補助的な字母《越》の使用数は読本本文と合巻でさほど変わらない。《越》は助詞に使用されている場合のある字母だが、使用の偏りなどの指摘はない。

以上のように、《加》《起》《徒》《仁》《飛》《満》は、他の文献にも登場し、語の特定の位置に使用されることの多かった字母であると分かる。また、《越》は助詞に使用される場合が多い。これらを踏まえると、Bに該当する字母は文・文章の表記に用いられたものであり、読本本文、合巻といった平仮名での文・文章表記で語の区切れや文の切れ目などの表示に活用された仮名と考えられる。しかし、《連》は機能を断定し難く、先行研究を参照すると、むしろ装飾的な役割があったかと推測された。

【カ】【キ】【ツ】【ニ】【ヒ】【ヲ】は個々の仮名において、読本本文と合巻の間ではさほど使用数に大きな異なりはないように見受けられる。一方で明らかに読本本文と合巻で使用比率が異なる仮名があった。

【マ】は合巻の《満》の使用比率が読本本文より多い。【レ】は読本本文において《連》の割合が合巻より多い。こうしたことは、読

本本文、合巻においてそれぞれ補助的な字母の使用に違いがあることと表れである。

読本本文と合巻で、語の区切れや文の区切れを示す字母が使用されていたとすれば、漢字仮名交じり文と平仮名主体の文とで、その機能が使用される場合も変化するに違いなく、《満》《連》は特にジャンルの異なりが影響するのだと考えられる。

五

最後に、Fに該当する、読本本文にのみ使用された字母を検討していきたい。これらは『椿説弓張月』における字母の種類を豊富にしており、最も特徴的な面といえる。

該当する仮名は【ア】【ケ】【コ】【ス】【ツ】【ト】【ニ】【ノ】【ハ】【フ】【ヘ】【メ】【ル】【ロ】である。それぞれの使用数は表4にまとめた(割合(小数点以下第三位までを四捨五入)を括弧に入れて示す)。表には同じ仮名であるA・Bの字母と併記し、Fに該当する字母には◎を付してある。

Fの字母は、いずれもその仮名において使用比率が最も高い字母より少ない。

【ア】は《阿》が《安》に対してはるかに少ない。この字母は黄表紙や洒落本に使用されることもあるが、特定の用法を指摘されていない。

【ケ】はAに分類された《介》《計》と《希》が使用されていた。《希》の使用比率も《介》《計》に比して低い。この字母も黄表紙で

表 4

	字母	読本本文		字母	読本本文
ア	安	106 (92.1%)	ノ	乃	505 (97.1%)
	◎阿	9 (7.8%)		◎能	15 (2.9%)
ケ	介	57 (64.8%)	ハ	八	417 (88.3%)
	計	25 (28.4%)		者	39 (8.3%)
	◎希	6 (6.8%)		◎盤	16 (3.4%)
コ	己	162 (98.8%)	フ	不	128 (97.7%)
	◎古	2 (1.2%)		◎婦	3 (2.3%)
ス	春	167 (86.5%)	ヘ	部	189 (99.5%)
	寸	9 (4.7%)		◎遍	1 (0.5%)
	◎須	17 (8.8%)		女	27 (93.1%)
ツ	川	96 (91.4%)	メ	◎免	2 (6.9%)
	徒	8 (7.6%)		留	258 (98%)
	◎津	1 (1%)		◎累	2 (0.8%)
ト	止	414 (99.8%)	ル	◎流	2 (0.8%)
	◎登	1 (0.2%)		◎類	1 (0.4%)
	尔	473 (87.1%)		呂	25 (67.6%)
ニ	◎丹	67 (12.3%)	ロ	◎路	12 (32.4%)
	◎耳	2 (0.3%)			
	仁	1 (0.2%)			

使用されることがある。⁽²⁶⁾しかし、その使用は、文献によっては非語頭だったり、語頭だったり、定まった傾向が報告されていない。⁽²⁷⁾「コ」は《古》がわずかに使用されていた。この《古》は読本『兩月物語』、洒落本、黄表紙でもみられる。恋川春町の小説類に、語頭での特定使用が報告されているほか、洒落本『傾城買二筋道』でも語頭に限って使用されている。⁽²⁸⁾

「ス」は《春》《寸》のほかに《須》が使用されていた。傾向の定まらない《春》《寸》とは違い、《須》は多くの文献で語末、助詞へ

の使用が報告されている。⁽²⁹⁾振り仮名や合巻に共通した《寸》よりも《須》の使用比率が高いこともあり、『椿説弓張月』本文においても《須》は特定の使用がされていた可能性が高い。

「ツ」には《津》が使用されていた。この字母は他の文献であまりみられないものであり、『金々先生栄花夢』で語頭にときおり混ぜられる⁽³⁰⁾と報告されている以外に特に指摘はされていない。

「ト」には《登》が一例あった。この字母も他の文献にあまりみられないものである。天保期の『春色梅兒誉美』では和歌に使用されてきたことから視覚的效果を狙った字母だと推測されている。⁽³¹⁾

「ニ」は《尔》の次に《丹》が多く、《耳》はそれよりはるかに少ない。《丹》《耳》ともに特定の用法が分かっている⁽³²⁾いない字母である。

「ノ」は《能》が使用され、その比率はかなり低い。洒落本で助詞に使用されていたことが分かっているが、これも多くの助詞に《乃》が使用されている中で⁽³²⁾のこと、それ以上の用法は指摘されていない。

「ハ」は《盤》が使用されており、《盤》は他の文献にも助詞に使用されると分かっている。⁽³³⁾しかしこれも《八》を助詞に使用する場合が圧倒的に多い中でのことであり、洒落本『傾城買二筋道』では序文で《者》《八》とともに使用しての表記の多様化が指摘されている。⁽³⁴⁾

「フ」は《婦》が使用されていた。この字母は他の文

献で特定の語に使用される、特に指摘がない、語頭に混じる、といったばらつきがみられるものである。⁽³⁵⁾

【ハ】は《遍》が一例あった。これも《婦》と同様に黄表紙にもみられることがあるが、文献によって用法が見出せたり特になかったりする。⁽³⁶⁾

【メ】には《免》がわずかに使用されていた。この字母も他の文献にみられるが、用法を見出しがたい。⁽³⁸⁾

【ル】は最も多く、三つの字母がある。《累》《流》《類》はいずれも使用比率が低い。《累》は黄表紙に使用された例があり、《流》は読本『雨月物語』、洒落本『傾城買二筋道』に使用があったが、《類》は他の文献においても使用例がなかった。この三つの字母も、先行研究において特に用法を示されていないものである。

【ロ】の《路》は他の字母に比べて使用比率が高いといえる。⁽⁴⁰⁾《路》も特定の用法が指摘されていない。

以上のように、Fの読本本文のみに使用されていた字母は、洒落本、黄表紙、合巻などで総括して特定の用法を見出しがたいものが多いことが分かった。

『椿説弓張月』本文と、読本『雨月物語』や洒落本『無頼通説法』『傾城買二筋道』の本文の字母を対照すると、基本的な字母はおおむね合致し、読本本文のみの字母も、ほとんどがいずれかの本において使用されていた。『椿説弓張月』本文のみの字母は《類》だけであった。また現在の「ハ」の字母に当たる《波》が、『雨月物語』『無頼通説法』『傾城買二筋道』には使用されているのに、『椿説弓

張月』には使用されていなかった。⁽⁴²⁾これも『椿説弓張月』の特徴といえる。

教養層が読者対象とされていた前期読本、洒落本の流れを受けた後期読本『椿説弓張月』は、特定の用法がみられない字母、つまり装飾的な用字が意識された字母が多様に使用されていたとみられる。しかし、『椿説弓張月』独自の表記といえるほどの字の種類は使用されておらず、他の文献でもみられる字母を使用していることが分かった。

六

『椿説弓張月』と『行平鍋須磨酒宴』の平仮名には、まずどちらでも使われている基本的な字母があり、読本には更にジャンルを意識したかと考えられる字母があるということが、ある程度予想できることではあったが、確かめることができた。

読本なら使用するもの、合巻では使用を避けるものといった、平仮名の選択が可能であった実態がみえた。ジャンルによって平仮名表記に選択肢があるということは、現代にはない表記意識が江戸の小説類の仮名使用に表れているといえる。『行平鍋須磨酒宴』のほとんどの字母は他の多くの資料でも使用が認められ、当時の基本的な字母と考えるとよいだろう。仮名に対し一種から二種の字母が使用されて、二種の場合はいずれも片方が多めで、もう片方はそれより少なめという関係がみられた。また少なめの字母は他の文献で使用位置に偏りのある点が指摘されているものが多かった(ただし、今

回の調査の始めに述べように、字母の種類を概観することが趣旨なので、使用位置の実態については、同字母の別字体の問題を考慮しながら改めて調査したい。

一方で『椿説弓張月』は、『行平鍋須磨酒宴』と共通の基本的な字母も当然使用され、それに加えて読本のみのも字母があり、字母の種類豊富な特徴である。それらの字母を他の文献と対照すると、少し廻った読本や洒落本などに使用されたものと共通するものが多かった。この読本のみのも字母は他文献で使用位置の偏りの指摘がされていない、もしくは文献によって使用位置にばらつきがあるものがほとんどであった。これらの字母は、装飾的に用いられたと考えられる(なお、これらの『椿説弓張月』の実態も、改めて調査したい)。

読本の字母には他のジャンルにはみられない、特殊なものがあるのではないかと予想していたのであるが、既に検討したように、『椿説弓張月』のみにみられた特殊な字母は一種のみであり、ほかは黄表紙には少ないものの、『雨月物語』や洒落本二種と共通するものが多かった。読本板本の詳細な調査がなかったので今回その調査を行ったが、馬琴読本には、合巻のような大衆的・実用的な仮名使用に近いものと、洒落本などにみられた字母を受け継いで、装飾的な使用がなされたと考えられる面が併在していると見受けられた。

注1 本稿ではイロハ四十七およびンを加えた四十八の仮名の区別を「1」の中に片仮名を入れて示すことにする。また、字母は《》で囲んで表す。

2 前田(一九七二)において、中世の写本から江戸時代の板本の平仮名字体の種類の割合を調査し、比較することによって、中世の写本から近世の板本に移り変わる間に平仮名の種類が減少した点が示された。また、浜田(一九七九)では、古活字本、仮名草子、西鶴本、馬琴読本、草双紙といった各ジャンルの平仮名字体の総数が時代が進むにつれ収斂傾向にあることが述べられている。

3 木越(一九八九)では、上田秋成が『春雨物語』に使用している平仮名を字母で分類して調査しているが、自筆稿本における調査であり、板本の調査ではない。大島(二〇〇〇)では馬琴の『南総里見八犬伝』が調査されているが、こちらも自筆稿本から作家の表記意識を採ったものである。

4 浜田(一九七九)参照。

5 『滝沢馬琴集 第九巻』(古典叢書 本邦書房 一九九〇) 一八三—一八四頁

6 坂坂則子編『椿説弓張月前編』(笠間書院 一九九六)、『行平鍋須磨酒宴』(国立国会図書館所蔵合巻曲亭馬琴集 第三巻 フジミ書房 二〇〇八)によった。

7 例えば、玉村(一九九四)では複数の同字形仮名グループを平仮名字体として認定し、字体を定義している。

8 手ずれや汚れで判読不可能な平仮名、合字「こと」「ころ」「こそ」は調査から省いた。

9 矢野(一九九〇)、久保田(一九九六)、内田(一九九八a)・(一九九八b)・(二〇〇〇)の調査結果により、『保』は使用されないか、使用されても使用例がわずかであると分かっている。

10 前田(一九七二) 一二三頁—二二三頁

11 前田(一九七二)の調査結果を参照。以下、『雨月物語』の字母と対照する際は前田(一九七二)による。

12 内田(一九九八)、久保田(一九九五)(一九九七)(一九九八)(二〇〇九)、矢野(一九九〇)などで使い分けが指摘されている。

13 内田(一九九八a)(二〇〇〇)、久保田(一九九五)(一九九八)(二

- 〇〇九)、矢野(一九九〇)(一九九二)などで《春》《寸》は検討されているが、資料によってさまざまであり、統一的用法は報告されていない。
- 14 矢野(一九九〇)、久保田(一九九五)などで言及されている。
- 15 内田(一九九八a)、久保田(一九九五)(一九九六)(一九九七)(一九九八)、玉村(一九九四)で指摘されている。
- 16 久保田(一九九五)(一九九八)(二〇〇九)、矢野(一九九〇)(一九九二)などで指摘されている。
- 17 安田(一九六七)、坂梨(一九七九)参照。
- 18 内田(一九九八a)、久保田(一九九七)(二〇〇九)参照。
- 19 久保田(一九九七)(二〇〇九)参照。
- 20 内田(一九九八a)、久保田(一九九六)(一九九八)(二〇〇九)参照。
- 21 内田(一九九八a)、久保田(一九九五)(一九九六)(一九九七)(二〇〇九)、玉村(一九九四)参照。
- 22 内田(一九九八a)参照。
- 23 久保田(一九九七)参照。
- 24 板本文文に限って、久保田(一九九七)(一九九七)、内田(一九九八a)(二〇〇九)などで報告がされている。
- 25 内田(一九九八a)の黄表紙『金銀先生再寝夢』、同(一九九八b)の合巻『修紫田舎源氏』、久保田(二〇〇九)の洒落本『毛傾城買二筋道』、矢野(一九九〇)の黄表紙『心学時計草』、『新鑄小判』、『奇妙頂礼胎錫杖』、『怪談筆始』、『化物小遣帳』参照。
- 26 矢野(一九九〇)、『怪談筆始』参照。
- 27 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』では非語頭、久保田(一九九六)の黄表紙『無益委託』では語頭、久保田(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』では特定の語に限られて使用される、という指摘がある。
- 28 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』、久保田(一九九六)の黄表紙『無益委託』、同(一九九八)の『金々先生栄花夢』といった恋川作品、同(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』参照。
- 29 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』、久保田(一九九五)の赤本、久保田(一九九六)の黄表紙『無益委託』、同(一九九八)の『金々先生栄花夢』といった恋川作品、同(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』参照。
- 30 久保田(一九九八)参照。
- 31 玉村(一九九四)参照。
- 32 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、久保田(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』による。字母は『雨月物語』や矢野(一九九〇)の黄表紙『心学時計草』においても確認されている。
- 33 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』、玉村(一九九四)の『春色梅兒誉美』参照。『曾根崎心中』(坂梨(一九七九))でも使用が認められている。
- 34 久保田(二〇〇九)参照。
- 35 内田(一九九八a)の黄表紙『金銀先生再寝夢』では特定の語、久保田(一九九八)の黄表紙『金々先生栄花夢』では特になし、久保田(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』では語頭に混じる、とある。
- 36 矢野(一九九〇)、『心学時計草』、『新鑄小判』、『奇妙頂礼胎錫杖』、『怪談筆始』、『化物小遣帳』、矢野(一九九二)『尻擲御要慎』といった黄表紙による。
- 37 内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、黄表紙『金銀先生再寝夢』では語頭、久保田(一九九五)の赤本三種では特になし、久保田(一九九六)の黄表紙『無益委託』では語頭傾向が指摘されている。
- 38 久保田(一九九六)の黄表紙『無益委託』、同(二〇〇九)の洒落本『傾城買二筋道』にみられた。
- 39 矢野(一九九〇)、『怪談筆始』参照。
- 40 読本『雨月物語』、洒落本『傾城買二筋道』、黄表紙『金々先生栄花夢』などに使用が認められる。
- 41 読本『雨月物語』、内田(一九九八a)の洒落本『無頼通説法』、久保田(二〇〇九)『傾城買二筋道』の調査結果を、字母に直して換算し、対照した。

42 ほかに『雨月物語』には《遣》《佐》《寿》《堂》《地》《那》《日》《和》、『無頼通説法』には《具》《勢》《楚》《那》《美》《和》《惠》、『傾城買二筋道』には《佐》《楚》《堂》《美》《惠》が使用されていた。

参考文献

- 43 横山邦治編（一九八五）、中野三敏（二〇一一）二二〇—二二六頁参照。
- 内田宗一（一九九八a）「黄表紙・洒落本の仮名字体―恋川春町自筆板下本についての比較考察―」『国語文字史の研究 四』前田富禎・国語文字史研究会編 和泉書院
- 内田宗一（一九九八b）「修紫田舎源氏」の仮名字体―作者自筆校本と板本の比較考察―『待兼山論叢書 第三十二号 大阪大学文学部（二〇〇〇）』馬琴作合巻『金沢羅船利生稿』の仮名字体―筆耕による表記の改変をめぐって―『国語文字史の研究 五』前田富禎・国語文字史研究会編 和泉書院
- 大島悦子（二〇〇〇）『曲亭馬琴の文字意識―自筆資料の仮名字体について―』『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第十号 早稲田大学大学院教育学研究科
- 木越 治（一九八九）「上田秋成自筆本『春雨物語』における仮名字母の用法について」『金沢大学教養部論集』第二十六卷二号 人文学科編 金沢大学教養部
- 久保田篤（一九九五）「草双紙の用字法―赤本の仮名字体の用法を中心に―」『国語学論集』築島裕博士古稀記念『築島裕博士古稀記念会編 汲古書院』
- 久保田篤（一九九六）「恋川春町『無益委記』の表記―平仮名の字体について―」『茨城大学文学部紀要（人文学科論集）』二十九号 茨城大学文学部
- 久保田篤（一九九七）「浮世風呂」の平仮名の用字法『成蹊国文』三〇号 成蹊大学文学部
- 久保田篤（一九九八）「金々先生栄花夢」の文字の用法について『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』東京大学国語研究室

創設百周年記念国語研究論集編集委員会編 汲古書院
 久保田篤（二〇〇九）「江戸板本の表記の多様性―洒落本『傾城買二筋道』の場合―」『成蹊国文』第四十二号 成蹊大学文学部

坂梨隆三（一九七九）「曾根崎心中の「は」と「わ」―その仮名遣と仮名の字体について―」『茨城大学文学部紀要（人文学科論集）』十二号 茨城大学文学部

- 玉村禎郎（一九九四）「春色梅兒譽」における仮名の用字法『国語文字史の研究 二』前田富禎・国語文字史研究会編 和泉書院
- 中野三敏（二〇一一）『和本のすずめ』岩波書店
- 浜田啓介（一九七九）「板行の仮名字体―その収斂的傾向について―」『国語学』一一八集 国語学会
- 前田富禎（一九七二）「仮名文における文字使用について―変体仮名と漢字使用の実態―」『東北大学 教養部紀要』第十四号 東北大学教養部
- 安田 章（一九六七）「仮名資料序」『論究日本文学』二十九号 立命館大学日本文学会
- 矢野 準（一九九〇）「一九の文字生活―鳶屋黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に―」『近代語研究 第八集 吉田澄夫博士追悼論文集』近代語学会 武蔵野書院
- 矢野 準（一九九二）「自画像黄表紙の文字遣い―榎本版四種を中心に―」『国語国文研究と教育』二十七号 熊本大学
- 横山邦治編（一九八五）『読本の世界―江戸と上方―』世界思想社